泥んこ遊び

火あそび

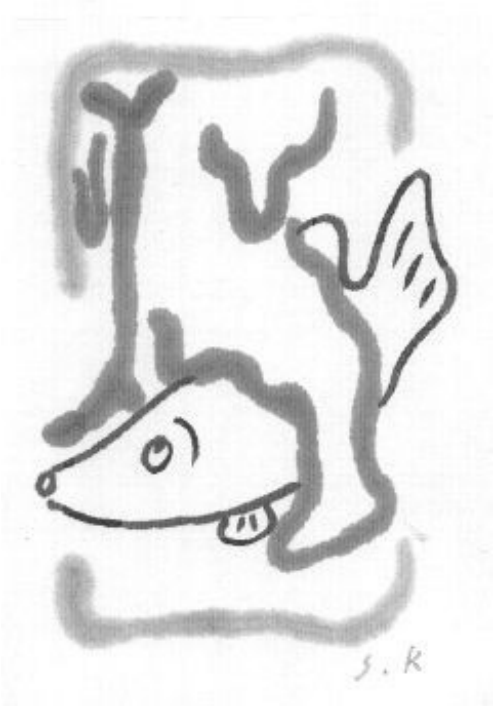
その Ⅱ

本当の石の窯

私は焼き物を始め、どうしても自分の手で焼いてみたくなった時、迷わず家に窯を造った。

とりあえず土を焼いてみたかった。それはほぼ物理実験の気分に似ている。もうずいぶん前の話になるが「常温核融合に成功」というニュースが世界を駆け巡り、いろんな研究室での追試の様子がにぎやかに放送されていた事があった。あの時、バケツやらポリタンクやら、熱帯魚の水槽やらにガムテープを貼ったりして組まれた実験装置を見て、口がアングリと開いてしまった方も多かったと思う。大概、そんな研究はどこからも予算が付かないので、廃物利用がほとんどだったりする。

そんな気分で作ったのが焼成室がミカン箱くらいの石の窯だった。火山国ならどこにでもあるただの安山岩で壁を組み、屋根には棚板を載せた。1100度位でその壁が溶け始める世にも恐ろしい綱渡り的な窯だった。



最初は素焼き程度という気持ちで焚き始めたのだが、順調に行き過ぎて1000度くらいまで温度を上げた。はやる気持ちを押さえて窯出しまで２日ほど待つ。

壁の石も熔けていない。少し黒く煤を食ってはいるものの、入れた花器の表面が部分的に熔けていたりしている。しかしそれが何とも言えずにいい味を出している。

これに味を占めて結局この窯を６回も焚いてしまった。焚き方も段々上手になり３回目で灰も熔けてきれいな焼きしめができるようになったのだが、恐れていた事がとうとうやってきた。壁石が熔けて床に溜まっていた。天井から1cmくらいから熔け始めている。せいぜい１㎜ほどの厚さで熔け流れていただけなので、その時はまださほど危険な状態ではなかった。でもそのまま３回も焚くとは…。私の楽天気質は強固な遺伝子によって保証されているようだ。

４回目で壁際の床に置いた鉄砲魚をかたどった水滴が熔けた石に食われてしまった。溶岩に飲み込まれた鉄砲魚である。今思えば窯を解体してこの鉄砲魚を残 すべきだったと悔やむのだが、その時の私はアーティストではなかった。研究者…でもなく、ただのいたずら好きなワルガキだった。

2003年9月

干物

　私が生まれ育った所はここ伊東と同じ様な海辺の町だ。フォッサマグナを何となく中央構造線で折り重ね、日本海側に折り重なった伊東の位置が丁度その辺りになる。今は聞かなくなったが子供のころは裏日本と言われていた。歴史的に見て、大陸の関係からこっちが表だろうと悔しがったものだ。それがそう言われなくなった今では、裏何とかと言う方がかっこ良くてクールで切れがいいなどと言われるようになってしまっている。それが又、いかにも裏らしくて、すねてみたりしたくなる。

　その裏からノコノコと花の東京に出てきたのは大学受験の時だった。受験生用の安宿で相部屋になったのが愛知から来た、良く喋る受験生だった。しかもその話に暗さが微塵も無い。ポンポン畳み掛けてくる話し振りに半ばカルチャーショックを受けながら私は否応無く感じていた。俺は紛れも無い裏日本だと。

　その裏の町辺りでは、鯵などというものは食卓に登っても、それ程ありがたくも無いただの大衆魚だった。それがここ伊東ではおもてなし料理になるのだ。旬の夏は油ののり具合もちょうど良く、美味この上ないが、伊東でも大衆魚であることには何ら変わりはない。

　裏の辺りじゃ干物となればなおさら、おもてなしに出すなどもっての外、それはただの保存食だった。気候の関係もあるのだろうが裏ではごく一部の魚を除いて干物はほとんど作らない。何と言っても生が一番、ちょっと美味いと思ってもシャイな裏の人間は鯵の干物なんかお客さんに出せはしない。

　ところが伊東の鯵の干物は美味いのだ。なかでも自分で作った干物は絶品だ。うす曇で程よく風の当たる日の朝干した干物を夜いただく。何しろ朝取りの刺身にできる鯵を使うのだ。保存の為ではなく、一手間掛けてアミノ酸を増やしたおもてなしの一品となる。裏の気分なんか一掃され、今度はその鯵をのせる皿が欲しくなってくる。

2004年2月

田舎の農閑期には物売りが驚くほどよく回ってきた。富山の薬売りを筆頭にまじめな行商がほとんどだが、中にはちょっと怪しげな者もいる。その中に呉服を持ってきた人がいた。娘に仕立てたものだが家がつぶれてしまい少しでもお金にしようと回っている、という話にほだされたのかは分からないが、祖母も一枚買った。花浅葱色でカトレアのような花に小花が飛んだ柄の京友禅で、子供の私の目にもとてもきれいに見えた。行商のおじさんの眉唾の話に、フンフンと相槌を打ちながらも呉服商いの経験のある祖母は値踏みをし、しっかり値切っていた。

ところでこの話には後日談がある。町内でこのおじさんから着物を買った家が何軒も出てきた。このおじさんが行く先々でさりげなく祖母の買い物を口にすると、ご近所みな釣られて買ったらしい。結局、このおじさんは祖母に値切られた分はおろか、その何倍も取り返して悠々と町を去っていった。

今思い返すとこのおじさんはたぶん計算づくで祖母に値切られたのだろう。してやった方も、してやられた方も農閑期の色んな騒ぎのうちの楽しいいーコマなのだ。

秋の筋雲がくっきりと高く立ち、北風が強く、海の荒れた日には親父たちが浜でよからぬ相談をし、女衆は自家製の漬物などを持ち寄って噂話や戦利品の品定めに余念がない。そんな時、今はアンティークになっている明治の印判の皿などがよく使われる。明治の印判の呉須は鉄の配合が多く、渋めだがしっかりした藍色になっている。田舎仕込みの沢庵や、芋の煮ころがしにはとてもよく合う。

昭和を彩ったこれらのアンティークが植木鉢の受け皿に格下げになっていたので、都会の我が家に全て引き取られてきた。その皿たちも東京から伊東へ引越し、平成元年七月十三日の伊東海底噴火の折に、大半が割れてしまった。一瞬で割れてしまうのが焼き物のいい所で、割れてしまえばきれいさっぱりと諦めが付いてしまう。

2006年10月

泥んこ遊び火あそび　そのII

http://p.booklog.jp/book/33084

２０１１年８月28日
著者：大門良一
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/uzuwa/profile

挿絵　表紙デザイン：セラ・カモン

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/33084

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/33084

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.